

第78話 (62頁) やせたさいふからは

あるびんぼうな人が町にでかけて、お呼ばれしました。そのあいだに、馬をどろぼうたちに連れ去られてしまいました。やせたさいふからは、さいごのお金も落ちてしまうものです。

「極め付きの、短いお話だね。文が三つだけで完結している。」

「本当にそうだ。貧乏な人が、お呼ばれしたからと、うきうきして、いつもよりおめかしして、少し緊張して、町へ出かけた。」

「そうかも、ね。ごちそうを食べていても、いつもと勝手が違って落ち着かなかったかな。」

「ところが、その間に乗ってきた馬を盗まれてしまった。これじゃあ、奈落の底へ突き落されたような気持だっただろうに。かわいそうすぎる。」

「やせたさいふからは、さいごの金も落ちてしまう。この締めというか結論は、ピタッと決まっている。貧乏な人は立つ瀬がないよ。」

「じゃあ、どうすればいいか、というと、どうしようもない。だから、あきらめろ、と…」

「弱り目に祟り目、あるいは、泣きっ面に蜂。そんなことわざが思い浮かぶ。」

「ところで、呼んだ人はだれなのか。金持ちに違いないけど、一切出てこない。」

「呼んだ人と馬泥棒はぐるで、そもそも仕組まれていた。読んでとっさにそう思ったけど(と周りを見回しても誰も賛成する様子がなく)、そんな可能性はないか。」

「盗まれた馬は、貧乏な人にとっては、大切な唯一の財産だったはずだ。」

「町では、馬泥棒ってよくあるのかな。もっと立派な、金持ちの馬を狙えばよかったのに。」

「西部劇では、さっそうと乗ってきた馬を柵につなぎとめる場面がよく出てくるけど、ロシアでもそんなふうだったのかな。」

「この話から、子どもたちはどう思うだろうか。悪いときはさらに悪いことが重なる、というのでは途方に暮れてしまう。」

「父親が馬で町に出かけようとしたら、子どもが『だめだよ、いいことないから』と必死で止めたりして…… (笑い)」